「善城村　五坊在、外ニ祈禱寺壱ヶ寺、毎月六日之日には五鬼坊此堂ニ而祈禱在と云」とあるほか、年一、二度前鬼五家の人々がそろって釈迦ヶ岳から大峯奥通を山上に出るならわしがあり、とくに小篠大護摩には日帰りで八里の道を往還したという。さらに「善鬼は米穀諸物池山池原村より人足出で日々往来す。多くは女人足也。善城村まで女往来あれどそれより上は女禁制也」

等とある。

明治九年（一八七六）一月調べでは、田一町六畝八歩、畑九反九畝一九歩、宅地二反七畝一八歩、山林四三一町三反六畝一〇歩、戸数七戸・社一戸・寺五戸（天台宗）・釈迦堂・本堂・灌頂堂・祖師堂・籠堂、計一八戸、人数三一、牛四とある。これ以前の明治二年三月に修験道五坊は京都の聖護院の所轄を離れ、同六年三月天台宗に所属した。同一二年と二四年の「寺院明細帳」によると、五坊には釈迦如来を本尊とする本堂と役行者・前鬼義覚・義賢・不動明王を祀る開山堂や庫裡をもっていたとある。明治一六年の前鬼村「村誌」（県立奈良図書館蔵）には、

本村ハ吉野郡ノ南端北山郷ト十津川郷トノ中間ニ在ル一小村ニシテ何レニ属スルト云事ナク一箇独立シ、古ヘ前牛山ト云ヒ、中古以来前鬼山ト改メ、亦タ近ク明治五年二至テ初テ奈良県ノ命令二因テ本郡第十五大区廿六小区二編入ス、而テ当山ノ付属地二ヶ所ヲ併セ惣称シテ前鬼村ト呼フ（下略）

とある。現在は小仲坊のみ残り、他は退転した。

前鬼から滝川（現十津川村）奥の花瀬（今は廃村）へ越える峠を嫁越峠という。十津川側から釈迦ヶ岳に登る信仰の道として利用された。幕末に十津川から北山郷に入った天誅組が越えて来たのもこの道である。

（注）

前鬼に関するこの記述は、下北山村の他の大字のそれを圧倒して、数倍の字数を占めている。前鬼への関心度の高さがみてとれる。「平安中期頃すでに開けていた村」とあるものの、その根拠が示されていないのが残念であるが、全体としてコンパクトにこの地域をまとめている。なお、「嫁越峠」であるが、大峰奥駈道はもともと女人の通ることのできない道であったが、十津川谷との交通のため、ここだけ女人が、一年のうち一定期間だけ大峯奥駈道を横切ることができたという。ここを通って十津川谷から前鬼へ嫁入りがあったので、このような名がついたらしい。「奈良県の地名」はここを天誅組が越えたというが、それは、天誅組から十津川勢が離反したのち、退路探索のための先遣隊として来村した、伴林光平・平岡鳩平・深瀬繁理の三人のみの退避行であった。余談ではあるが、本隊の方は数日遅れて南の「笠捨越」で下北山村を通過している。その差が天誅組本隊の命取りとなった。

前鬼に関するこの小文は、2014年「吉野郡中学校社会科研究部会」の幹事会が前鬼で開かれた際に話した内容を、同部会機関紙「いもせやま」に収録したものである。なお、それにはここに載せなかったが、以下の紹介文を含んでいる。

柳田国男著「鬼の子孫」）
大黒寺円覚著「大峰七十五靡奥駈修行記」
福井良盈氏著「大峰奥駈行場と入峯行」
地元前鬼にのこる文書；明治十五年十二月「前鬼村村誌」
大和國町村誌集
アンヌ マリ・ブッシイ氏著「実利行者と大峯山」
最後に

（以上、文責　巽正文）